

＜書 評＞

加賀谷 潤彦・他 著（埼玉大学教育学部）

運動処方—その生理学的基礎—

千野 直一（慶応大学リハビリテーション科）

リハビリテーション医学を専攻するものにとって“運動処方”は必須の課題であり、今回、加賀谷潤彦、加賀谷淳子両氏による「運動処方—その生理学的基礎—」の出版は、私どもの医療専門職種の間でも、その表題をみただけで興味をひかれる人々も少なからずいると思われる。

本書は8章から構成されており、その前半の4章まで（ただし内容的には全体の7割以上となる）が筋持久力に関する正常健康者、しかも、体育専攻の学生などを対象とした運動生理の基礎研究の集大成である。そして、後の章で運動（この場合はむしろ体育学といった方がよいと思われる）、ことに発育期の児童の体力向上を目的としたスポーツや、中高年者の体力維持を目的としたトレ

ーニングにはどのようなものがよいかを論じている。

各章の細項目には歴史的考察と自験例、さらに論議をならべて、著者のもっている知識と最新のデータのすべてを本書に投与されんとした意欲はひしひしと感ぜられる一方では内容が雑然としたきらいがあり、著者のいわんとする焦点をしぼりきれず、データの羅列という印象をぬぐいきれない。

第6章では日常生活動作との関連づけも心がけられ、臨床面でも心臓疾患の運動負荷に応用できるデータもあるが、本書の骨子は「序」にのべられているように“全身持久力の生理学的基礎”であり、臨床家にとっての“運動処方”とは異なることが、本書を一読してはじめてわかり、本

書の表題が臨床家にまちがった印象を与えそうである。

しかしながら、筋持久力に関する研究方法と龐大なデータ、および引用文献数は貴重であり、今後、種々の疾病者の運動負荷を研究するものにとって、本書のはたす役割は大きい。事実、本書の最後の部分ではじめて“低体力者”つまり、疾病者の研究資料はのせていないことわっておられるが、別の見方をすれば、本書は、運動生理学者と臨床家との共同研究をよびおこす啓蒙書ともいえる。

このような観点から、臨床面でも応用できる運動学の序論的なものの別冊を運動生理学に豊富な経験をおもちのお2人の著者にお願したい。そして、結論的には、臨床家のなかで運動療法に関心をもつものが年々増えており、今後、この方面での研究をすすめたい人々にとっては一読に値する貴重な書物といえる。

（B5，頁270，1983，¥5,500，杏林書院刊）